涼しい。

作、合田団地（努力クラブ）

登場人物
私
友達
先輩
彼氏
武器屋
少女
男

――「」は台詞。『』は独白。
――舞台奥に平台。これが電車の座席になったり、ソファになったり、ベンチになったり、ベッドになったりする。

――時期は一月末くらい。

○街から随分離れた地元の駅の駅前、夕方
――夕日が赤い。
――私と友達がいる。二人で、夕日を見ている。

私「すごいね」
友達「なにが？」
私「夕日」
友達「あー、確かにすごいね」
私「こんなにはっきりとしたオレンジになることってあるんだね」
友達「オレンジ？」
私「うん。オレンジ」
友達「赤くない？」
私「え、赤いかな」
友達「オレンジにしては赤くない？」
私「オレンジってもともと赤いじゃん」
友達「え、違う違う。オレンジはもっと黄色と赤の中間くらいの色だよ」
私「うん。だから、中間くらいじゃない？」
友達「これ？」
私「うん」
友達「これが？」
私「うん」
友達「中間かなあ。赤いとは思うけど」

私「まあいいや。どっちにしてもすごくない？」
友達「すごいね。本当に燃えてるみたい」
私「燃えてるよ」
友達「太陽？」
私「太陽」
友達「太陽が燃えてるのは知ってるけど、でも、本当に燃えてるんだって思うことってあんまりなくない？」
私「ないかも。いちいちそんなこと気にしないかも」
友達「太陽がこんなに赤くなることってあんまりないよね」
——私、友達の方を向いて、
私「言ってもいい？」
友達「なに？」
私「私ね、ふふふ、忘れないと思う」
友達「私も」
私「え、なんで？」
友達「なんでって悲しいな。私だって忘れないよ」
私「そっか。あのさ、来てくれてありがとう」
友達「うん」
私「もし来てくれてなかったら寂しかったな」
友達「来たんだからそんなこと言わなくても別にいいじゃん」
私「そうだね」
友達「本当に行くの？」
私「え、なに？　止めに来たの？」
友達「そういうわけじゃないけど。本当に行くんだね。すごいね」
私「すごいかな。別にすごくないよ」
友達「だってすごいじゃん」
私「そうかなあ」
友達「私には絶対無理だな。そんな勇気ないもん、私には」
私「勇気あったらする？」
友達「なんとなくしたいなあって思うときもあるけど、たぶん、しないかな」
私「勇気とか、そんなんじゃないよ」
友達「なんで？」
私「なにが？」
友達「昨日あれから考えたんだけど、全然わからなくて。なんでいなくなるの？」
私「いなくなりたいからかな」
友達「なにそれ？」
私「違うな。いなくなってみたいから」
友達「いなくなってみたいって？」
私「私のことなんてなかったことにしてほしい」
友達「どういうこと？」
私「私がいなくなったら、私のこと忘れてくれていいからね」

友達「え、いつまで家出続けるつもりなの？」
私「え。ずっと」
友達「あ、本気のやつ？」
私「うん」
友達「あ、そうなんだ。冗談のやつかと思ってた」
私「うん」
友達「忘れないよ」
私「本当かな？」
友達「私は絶対忘れない」
私「でも、忘れられると思うよ。時間が経てば、普通に」
友達「そんなことないって。絶対忘れない、と思う」
私「どうかなあ。なんで、憶えていられるって思ってるのか、私にはわからない」
友達「忘れられたりしたら寂しいじゃん。だから私は忘れないし、忘れたくないし」
私「あ、自分がそうだからか。うん。ありがとう」
友達「忘れられたら寂しくない？」
私「寂しいけど、そういうもんじゃないのかな。忘れないでって、そんな贅沢なことは言えない」
友達「そうかなあ」
私「忘れてもらった方がいいよ」
友達「すごい寂しいこと言うじゃん」
私「でも、本当にそう思う。恥ずかしいもん、ずっと憶えられてたら」
友達「恥ずかしいかな。あ、何時の電車で行くの？」
私「え？」
友達「まだ話してても大丈夫？」
私「大丈夫。決めてないから」
友達「なんでいなくなってみたいの？」
私「聞きたい？」
友達「よかったら教えてほしい」
私「え、なんで聞きたいの？」
友達「私にもこういう面白い友達がいたんだって憶えていたいから」
私「面白くないよ」
友達「なんでいなくなりたいの？」
私「いなくなった方がいいから」
友達「いなくなった方がいいって、誰かにそんな風に言われた？」
私「誰にも言われてないけど、でも全部私のせいみたいになるし、だから私がいなくなった方がみんな幸せになると思う。幸せっていうか、わかんないけどいい感じになると思う」
友達「そんなことないよ」
私「だって全部私が悪いんだから、私がいなくなったら、なんかそういう感じになるでしょ。悪くするやつがいなくなるんだから」
友達「関係ないよ。考え過ぎだと思う、私はそれは」
私「自意識過剰かもしれないけど」

友達「うん」
私「自意識過剰かもしれないけど。なんか辛いからな」
友達「うん」
私「でも、いなくなってみないとわからないから。私がいなくなってなにも変わらなかったら、それで初めて私の考え過ぎってわかるけど」
友達「それって戻ってこないと確かめられないじゃん」
私「そうだね」
友達「戻ってくる？」
私「わからない」
友達「いつ戻ってくる？」
私「わからない」
友達「いづでも、戻ってきたらいいよ。かっこ悪いかもしれないけど、そのときは私は絶対味方でいるから」
私「うん。ありがとう」
友達「いなくなるのやめたら」
私「あ。やっぱり止めに来たんだ」
友達「だってずるいもん。やめなよ、いなくなるの」
私「覚悟決めたし」
友達「怖くない？」
私「怖いけど、覚悟決めたから」
友達「そっか。わかった」
私「こうやってまた人を不快な気持ちにさせる」
友達「不快になってないよ」
私「そう？」
友達「なってないよ」
私「そっか」
友達「行くの？」
私「行くよ」
友達「帰って来るの？」
私「わからない」
友達「寂しいな」
私「ごめんね」
友達「こっちこそごめんね」
私「え、なんで？」
友達「いなくなってみたいって思わせちゃって」
私「私、ずっと居場所がないって思ってたから。ずっとだよ、ずっと。どこにいても居心地悪いなあって。でも、本当はそんなことないんだろうなってわかってる。だから、それって私の性格なんだと思う。全部私が悪いって思うのも、居場所がないなあって思うのも、私の性格。ごめんって言わないでほしい。私が悪いんだし」
友達「ここからいなくなってどうするの？」

私「だから、忘れてくれたらいいよ。私も全部思い過ごしだって思えたらいいなあ」
友達「あ、違うよ。言い方間違えた。電車乗ってからどうするの？」
私「あ、そういうことか」
友達「うん」
私「先輩のところに行こうと思ってる。一回行ったことあるんだけど、いつでも来ていいよって言ってくれたし、一人暮らしなのに広いところに住んでて、一部屋使ってない部屋があったから、そこの部屋使わせてくれると思う」
友達「わかった。思ったよりちゃんと計画決めてるんだね」
私「あ、誰にも言わないでほしい、このことは」
友達「うん」
私「ありがとう」
友達「どういたしまして」
私「そろそろ行こうかな」
友達「私たち、友達だよね」
私「うん。もちろん」
友達「ずっと友達って思ってていいよね」
私「私はいいけど、いいの？」
友達「いいよ」
私「ありがとう」
友達「じゃあ、ずっと友達」
私「うん。じゃあ、私、行くね」
友達「うん」
——私、また夕日を見る。それにつられて、友達も夕日を見る。
私「こんな夕焼けの日に旅立てるなんて本当に良かった。なんて言ったらいいかわかんないけど、記念になるね」
友達「そうだね」
私「ワクワクする。じゃあね。元気でね」
友達「そちらこそ元気でね。戻ってきたいと思ったら戻ってきたらいいからね」
私「うん。ありがとう」
——友達、いなくなる。

○先輩が住む街へ向かう電車の中、夜。
——私、ロングシートの座席に座る。
私『電車に乗ると、あっという間に暗くなった。いっときと比べて、日は長くなったと思うけど、それでもまだまだ日没は早い。
友達が駅まで見送りに来てくれた。彼女のことは親友だと思っている。彼女にだけは、家出の計画を話していた。あまり応援してくれてるような感じじゃなかったから、まさか来てくれるとは思わなかった。来てくれて嬉しかった。
電車は私の街からどんどん離れて行く。さようなら、私の街って感傷的な気分のフリをしてみる。本当はなんとも思っていない。家出っていったって、自分でもどれほどの覚悟を持っているのかわからな

い。ずっとかもしれないし、しんどかったら二、三日で帰るかもしれないし。
電車は私の街からどんどん離れて、先輩が暮らしている街に向かっている。先輩が暮らしている街は各駅停車しか止まらないから、私は各駅停車に乗って向かっている。一駅進むごとに気持ちが高ぶってくる。家出かあ。これから今まで一度も体験したことがないことを私は体験するのだ。
特急と急行の通過待ちのアナウンス。
私は誰からも愛されたことがない。愛されていると実感を持ったことがない。愛というものが本当にあるのか、私だけが与えられていないのかはわからないけど、たぶん、私だけが与えられていないのだと思う。どうしてみんなあんなに無防備に楽しそうにできるのだろう。もしかして、みんなは愛されているという確信を持っているのかもしれない。もし、まわりが敵だらけだったら、あんな風に振る舞えるわけがないと思う。
どうして私のまわりは敵だらけなのだろう。いや、敵は言い過ぎだな。そんな大袈裟なものじゃない。でも、心を許せる相手なんて誰もいない。変な緊張感がずっとある。あ、私が悪いのか。相手に心を許す勇気を持てないのが悪いのか。勇気を持たないといけない時点でどうかと思う。
特急と急行に追い抜かれて、私の電車はやっと出発する。
私は私の街から逃げる。大丈夫。誰も心配したりはしないはずだ。みんな、私の本性に気付いていてくれたらいいのに。あいつは変だって。あいつはおかしいって。あいつは普通じゃないからいなくなった。平気そうにしてたけど、本当は息苦しそうだったから仕方ないんじゃない。いなくなって当然。って思ってくれていたらいい。いや、そんなことすら思われていない方が本当はいい。いなくなったことも気付かれずに、初めからいなかったことにしてくてたら一番いい。
まあいいや。どうせ数日もすれば、どっちにしても忘れられるんだから。このまま帰らなかったら帰らなかったで忘れられたままだろうし、もし帰ったら帰ったで私さえ何事もなかったように振る舞えば、みんな何事もなかったようにしてくれるはずだ。人生なんて意外と思い通りになることを私は知っている。
窓に映る自分の顔を見る。みんなどう思ってるか知らないけど、私は自分の顔が好きだ。
電車が先輩の暮らしている街に着いて、電車を降りる。

○先輩が住む街の駅の駅前、それから住宅街をくぐり抜けて、先輩が住んでいるはずのマンションへ
――私、立ち上がる。きょろきょろ歩きながら、
私『駅前にはファミリーマートがあって、あと居酒屋が何件かある。寒い。夜になって気温が下がったみたいだ。おぼろげな記憶を頼りに先輩が住んでいるマンションを目指す。少し歩いたら、お店がなくなって暗くなる。見える景色が家ばかりになる。知らない夜の住宅街を歩くのは心細い。私が知らないこの街独自のルールがあって、そのルールを破ってしまったらどうしようって考えても仕方がないことを考えて不安になる。私は部外者だ。不安になりながら歩く。歩いていたら、寒くなくなってきた。確か、この角を曲がれば先輩のマンションがあるはずだ。あった』

○先輩が住んでいるはずのマンション
私『マンションの中に入って、エレベーターに乗って、先輩の部屋の前に着く。呼び鈴を押すのを躊躇する。今まで勢いのままに来てしまったけど、泊めてくださいって頼んでも断られたらどうしようって急に不安になる。出発する前に、行きますって連絡しておけばよかった。今更くよくよ悩んでも仕方がない。断られたらそのとき考えよう。勇気を振り絞って呼び鈴を押す。

なにも反応がない。もう一度押してみる。聞き耳を立ててドアの向こうの気配をさぐる。やっぱり反応がない。どうやら留守みたいだ。どうしよう。先輩がいないかもしれないって全然考えてなかった。どうしよう。どうしよう。どうしよう。帰るわけにもいかないし、だからといって他にあてがあるわけじゃないし。先輩が帰って来るまで、マンションを出て、エントランスの段差になっているところに座って待つことにする』

○マンションのエントランス

私『さっきまで温もっていた体が冷えてくる。歩いて、汗をかいていたから余計に。寒い寒い寒い。なぜ私はこんな辛い目にあっているのだろうか。私が一体なにをしたというのだろうか。

それにしても寒いな。冬の夜ってこんなに寒いのか。知らなかった。私は今まで冬の夜がこんなに寒いということも知らずに生きてきたんだな。

マンションの入り口で先輩を待っていると、いろんな人が帰ってきて、私のことをちらっと見たり、じろじろ不審な目で見られたりした。

あー、寒い。時間を確かめるためにスマホを見る。親からラインが来てる。来てることだけ確認して読まずに無視する。早く先輩帰って来ないかな。でも、いいや。これだけ辛い思いをしているんだから、きっと先輩は私に優しくしてくれるに違いない。帰って来た先輩は、私を見つけて驚いて、凍えた私の体を抱きしめてくれるだろう。寒さに耐えれば耐えるほど、辛さに耐えれば耐えるほど、きっと先輩は私に優しくしてくれる。きっと私は幸せになれる。勝手に来て、勝手に待って、勝手に耐えて。私が幸せになれるかどうかなんてなんの関係もないことは本当はわかっているけれど、幸せは望めば叶うものと私は信じたかった』

——先輩、帰って来る。

先輩「あれ」

私「あ」

先輩「あれ。あ、そうだよね」

私「え？」

先輩「そうだよね？」

——私、立ち上がる。

私「あ、はい」

先輩「こんなところでなにしてるの？」

私「あ、あの」

先輩「うん」

私「あの、まあ、あの」

先輩「こんなところでなにしてるの？」

私「えっと、あの」

先輩「もう」

私「すみません」

先輩「寒くない？」

私「寒いです」

先輩「ずっとここにいたの？」

私「はい」

先輩「とりあえず、うち来る？」
私「え、いいんですか？」
先輩「いいよ。うちに来たんでしょ」
私「じゃあ、お邪魔します」
先輩「じゃあ、おいで」
私「はい」

○マンションの廊下
——二人、移動しながら、
先輩「なにしてたの？」
私「地面を見てました」
先輩「地面？」
私「先輩が帰って来るの待ってました」
先輩「ずっと？」
私「まあ、はい。ずっと」
先輩「じゃあ、寒かったでしょ」
私「寒かったです。冬の夜に、外でじっとしてるのってこんなに寒いんだって思いました」
先輩「ごめんね。遅くなっちゃって。外でご飯食べてたから。来るなら連絡くれたらよかったのに」
私「まあ、そうですよね。なんか急に来たくなっちゃって」
先輩「あ、そうなんだ。急に？」
私「あ、はい」
先輩「本当に？」
私「え、はい」
先輩「そっか。なんかあったの？」
私「はい」
先輩「まあ、そりゃ絶対なんかあるよね。連絡もしないで、急に来るくらいだもんね」
私「ごめんなさい」
——先輩、立ち止まって、
先輩「全然いいんだけど。鍵開けるからちょっと待って」

○先輩の部屋
——先輩、鍵を開けて、部屋の中に入る。私はその場でいる。
先輩「どうぞ」
私「お邪魔します」
——私、部屋の中に入る。
先輩「散らかってるけど、ごめんね。我慢してね」
——先輩、ソファに座る。
私「いや、全然」
先輩「バッグ、好きなところに置いてくれたらいいから」
私「あ、はい。ありがとうございます」

先輩「ここ、いいですか？」
私「うん。いいよ」
　　――私、地べたに座る。
私「あ、あの、すいません」
先輩「ん？」
私「トイレ、借りてもいいですか？」
先輩「あ、そっか。体冷えてるもんね。どうぞ。部屋を出て一つ目のドアがそうだから」
私「ありがとうございます」
　　――私、いったんいなくなる。
　　――先輩、その間にテーブル持ってきたり、エアコンをつけたりして、舞台を部屋として誂える。
　　――私、戻ってきて、また同じところに座る。
私「ありがとうございました」
先輩「適当に座って」
私「あ、はい」
先輩「今、エアコンつけたから、ぬくくなるまでちょっと待ってね」
私「はい。すみません」
先輩「久し振りだね」
私「あ、はい。お久し振りです」
先輩「元気だった？　みんな元気してる？」
私「はい」
先輩「何年になったんだっけ？」
私「高等部の二年です」
先輩「そっか。じゃあ、そろそろ進路のこととか考えはじめる時期だ」
私「そうですね。先輩はどれくらいの時期から考え始めました？」
先輩「どうしたの？　今日」
私「ごめんなさい」
先輩「あ、別に攻めてるわけじゃないよ。単純にどうしたのかなあって思っただけ」
私「あの、家出」
先輩「家出？」
私「家出してきました」
先輩「え、ほんと？」
私「はい。家出してきました。あの、それで、なんですけど」
先輩「うん」
私「相談したいことがあるんですけど」
先輩「なに？」
私「あの、今日、泊めてもらえないですか？」
先輩「別にいいけど」
私「ありがとうございます。良かったあ。助かったあ」
先輩「大袈裟じゃない？」
私「だって、先輩に断られたら私野宿でしたよ」

先輩「今の季節で野宿なんてしたら死んじゃうよ。それだったら嫌かもしれないけど、いったん帰ってた方がいいと思う」
私「死んじゃうよりかはそうですよね」
先輩「でも、すごいね。なんか、喧嘩でもした？」
私「え？」
先輩「親とか、家族とかと」
私「いや、してないです」
先輩「え、なんで家出したの？」
私「まあ、あの、なんとなくですね」
先輩「なんとなく？」
私「ごめんなさい。うまく説明できなくて」
先輩「いや、いいけど」
私「なんか、あの、遠出してみたくて」
先輩「一人旅行みたいな感じ？」
私「まあ、ちょっと違いますけど、そんな感じです」
先輩「冒険みたいな感じ？」
私「そんな感じだと思います」
先輩「え、冒険？」
私「でも、そんな感じです」
先輩「へえ、いいなあ。若いね、やっぱり」
私「え、いや、そんなに変わんないじゃないですか」
先輩「いやいや、全然違うよ」
私「そうですかね」
先輩「もう冒険なんて、そんな無謀なことに挑戦するの考えられないもん」
私「え、まだまだいけますよ」
先輩「私もしてみたかったけどなあ、冒険。秘宝とか探してみたかった。あ、家出っていうことは、親には黙って来てるんだ」
私「まあ、家出ですからね。なにも言ってません」
先輩「泊まってもらってもいいけど、責任とかはとれないからね」
私「え、責任？」
先輩「いや、なにかあっても。私は責任はとれない」
私「あ、はい。ご迷惑をおかけします」
先輩「あ、ごめんごめん。楽にしてくれてていいからね。あ、そうだ。お腹空いてるよね」
私「え、あ、はい」
先輩「なんかあったかいもの作ってあげよっか。簡単なものしか作れないけど」
私「え、いいんですか？」
先輩「うん。いいよ。本当に簡単なものしか作れないけどね。じゃあ、食べながら話聞かせてね」
――先輩、いなくなる。
私『先輩からのこの申し出はありがたかった。自分からは言い出せなかったけど、お腹が空いて仕方がなかった。部屋はだんだん暖かくなってきたけど、体の芯はまだまだ冷えたままだし。

先輩が泊めてくれることになって本当に良かった。断られていたらと思うとゾッとする。泊まるところがないからといって、おいそれとは家には帰れない。知らない街を一晩中さまよい続けるところだった』

——先輩、料理を持って戻ってくる。テーブルに料理を置いて、私と向かい合うように座る。

先輩「あるので適当に作ったからあんまりおいしくないかもしれないけど」

私「いただきます」

先輩「はい、どうぞ」

——私、食べながら、

先輩「どう？」

私「あったかくて、おいしいです」

先輩「よかった。そっかあ。家出かあ。すごいねえ」

私「すごいですかね」

先輩「すごいよ。私も、親と喧嘩したときは家出したいと思ったけど、全然できなかったもんね」

私「なんでですか？」

先輩「うーん、なんでだろう。あんまり現実的じゃなかったからかな。勇気もなかったし。泊まる場所とかご飯とかのこと考えたら、家出するほどのことじゃないなって。面倒くさくなっちゃって。喧嘩もするけど、そんなに居心地悪くなかったからね。家出するときって、どうなの？　そういうこと考えてから家出するの？」

私「そういうことって？」

先輩「ご飯のこととか泊まる場所のこととか」

私「でも、あんまり考えてなかったと思います。勢いで」

先輩「どうにかなるだろうって？」

私「あ、はい。あ、でも、全然なんにも考えてなかったですね」

先輩「私、全然そんな切羽詰まるようなことなかったもんな。大変だったね」

私「あ、いや、そんなこともないんだけど」

先輩「もう、家には帰らないつもり？」

私「しんどくなってきたら帰ろうかなって思ってるんですけど、できるだけ続けようかなって思ってます」

先輩「ふーん。あ、あのさ、言ってないから知らないと思うんだけど」

私「え、はい」

先輩「私、彼氏、いるんだ」

私「え、あ、はい。あ、でも、この前は来たときはいなかったですよね」

先輩「そうなんだけど。できて。それで、ここで、同棲してるんだよね。同棲っていうか、あいつが転がり込んできただけなんだけど。それでもいいかな？」

私「え、お邪魔ですかね、私」

先輩「そういうつもりで言ったんじゃなくて、男の人も一緒だけど大丈夫かなって意味」

私「大丈夫です。え、彼氏さんなんですよね」

先輩「うん。そうだけど。気持ち悪くない？」

私「え、なんで気持ち悪いんですか？」

先輩「そうか。よかった。でも、ごめんね。男の人と一緒で気持ち悪いと思うんだけど、我慢してね」

私「え、彼氏さん、そんな気持ち悪い人なんですか？」

先輩「違う違う。彼氏は、別に、普通なんだけど、なんでわかんないかな。状況が気持ち悪いんじゃない
かって思ったんだけど、平気かな？　平気っぽいね」
私「私、泊めてもらう立場なんで、なんでも大丈夫です」
——先輩の彼氏、帰って来る。
彼氏「ただいまー」
先輩「あ、噂してたら帰って来た。おかえりー」
彼氏「あれ、誰か来てる？」
先輩「うん。私の高校のときの後輩」
彼氏「こんばんは」
私「あ、こんばんは」
先輩「で、これが私の彼氏」
彼氏「これって」
私「素敵な彼氏さんですね」
先輩「そう？
私「え、全然気持ち悪くない。っていうか、かっこいいじゃないですか」
先輩「いやいや、そんなお世辞いいって」
彼氏「なに、気持ち悪くないって。そんな話してたの？」
先輩「してないよ。勝手にこの子が、気持ち悪くても平気って言いだして」
私「え、言ってないですよ」
彼氏「なに？　どういうこと？」
先輩「え、言ってたじゃん。え、あれ。平気じゃないの？」
私「平気ですけど。気持ち悪いって言ってないです」
彼氏「あれ、じゃあ、誰が俺のこと気持ち悪いって言ったの？」
先輩「私は言ってないよ」
私「私も言ってません」
彼氏「よくわかんないなあ。俺、気持ち悪い？」
私「気持ち悪くないです」
先輩「まだ大丈夫なんじゃない」
彼氏「なんだよ、まだ大丈夫って。もうすぐ気持ち悪いみたいじゃんか」
先輩「気持ち悪いみたいなところもあるよ」
私「え、本当ですか。こんなにかっこいいのに」
彼氏「え、かっこいい？」
私「はい」
彼氏「ありがとう。でも、そう言うあなたこそ、可愛いですよね」
私「え、本当ですか？」
彼氏「いや、可愛い可愛い」
私「ありがとうございます。お世辞でも嬉しいです」
彼氏「お世辞じゃないよ。本当に可愛い」
私「え、真に受けますよ」
彼氏「真に受けてもらってもいいよ」

私「わー。そんなこと言われたことないからどう反応したらいいかわからない」
先輩「でも、好きなタイプだよね」
彼氏「うん。そうだね。好きなタイプ。えっと、めちゃくちゃ好きなタイプ」
私「あ、そうなんですね」
彼氏「あれ、でも、今日、誰か来るとかって言ってたっけ？」
先輩「ううん。言ってないよ」
彼氏「あ、そうだよね。帰ってきたら知らない可愛い子がいたからびっくりした」
先輩「ちょっとちょっと。可愛いって言い過ぎだよ。そんなに言われたら気持ち悪いって。ねえ？」
私「いや、全然嬉しいですね」
先輩「そう？」
私「あ、はい」
先輩「あのね、なんかね、突然来ちゃって」
私「あ、すみません」
先輩「あ、全然いいんだけど。なんかね、この子」
彼氏「うん」
先輩「なんで来たと思う？」
彼氏「なにそれ。クイズ？」
先輩「そう。なんで来たと思う？」
彼氏「うわ、出たクイズ」
先輩「なんで来たでしょう？」
彼氏「電車」
先輩「そういうことじゃなくて」
彼氏「車？」
先輩「だから、そういうことじゃなくて」
彼氏「セグウェイ」
先輩「全然違う」
彼氏「電車でも車でもないならわからないよ。教えてよ」
先輩「設問の意味を全然わかってくれない。馬鹿なんじゃないの」
彼氏「誰が馬鹿だー」
先輩「キャー。馬鹿が大きい声出したー」
彼氏「誰が馬鹿だー」
先輩「え、馬鹿だよね？　馬鹿だと思うよね？」
私「あ、はい。あの、これって、イチャイチャされてる感じですよね」
先輩「イチャイチャしてないですよ」
私「あ、すいません」
先輩「あのね、家出してきたんだって」
彼氏「家出？」
先輩「そう」
彼氏「え、家出？」
私「はい」

彼氏「あ、なんでってそういうこと？」
先輩「そうだよ」
彼氏「やっと設問の意味がわかったわ」
先輩「遅いわ」
彼氏「あー、家出少女」
私「まあ、そうですね。家出少女」
——彼氏、私との距離を気付かれない程度に詰める。
彼氏「わあ、家出少女だ。家出少女だ。これが家出少女かー。なるほどな。これが家出少女なのかー」
先輩「家出少女って言い過ぎだよ」
彼氏「だって、初めて見たし。俺、見たことないんだよね、家出してる子って。ネットではたまに見かけるけど、本当に家出してる子なんているんだ」
先輩「でも、なんて言ったらいいかな。のび太みたいな家出でしょ」
私「のび太みたいな家出？」
先輩「二、三日したら家帰るでしょ？」
私「あー、どうですかね。全然決めてなくって」
先輩「あ、今日この子、うちに泊まってもらうから」
彼氏「うん。わかった」
私「お世話になります」
先輩「気が済んだら帰った方がいいと思うよ。両親も心配してると思うし。別に喧嘩したわけじゃないんでしょ？」
私「そうなんですけどね」
先輩「二、三日、冒険したら気だって済むでしょ」
彼氏「え、冒険？」
先輩「そう。冒険してるような気分で家出してるんだって」
彼氏「へえ、そうなんだ。魔王とか倒しに行くの？」
私「いや、本当に冒険してるわけじゃないんで」
彼氏「秘宝とか探しに行くの？」
私「秘宝とかは探しにいきません」
彼氏「伝説の勇者の血をひいてたりしてない？」
私「確かなことは言えないですけど、たぶんひいてないと思います」
先輩「もう。適当なことばっかり言わないで。面白くないよ」
彼氏「別に面白いと思って言ってないよ」
先輩「ふーん」
彼氏「え、二、三日したら帰るの？」
私「でも、そのつもりです。ずっとお世話になってても迷惑になると思うんで」
彼氏「ずっと泊まってもらってもいいけどね、俺は。こんな可愛くて伝説の勇者の血をひいてる子がうちにいたら楽しいし」
私「え、血はひいてないですけど、いいんですか？」
先輩「私も別にいいっちゃいいけど」
私「ありがとうございます。ほんと、そう言ってもらえて嬉しいです。私、ずっと居場所がないなあって

思ってて、だから」
彼氏「自分の家かだと思ってヒットポイント回復してくれてたらいいよ」
私「ありがとうございます」
先輩「くどいよ」
彼氏「くどくないよ」
先輩「でも、みんな心配してると思うから、気が済んだら本当に家に帰りなよ」
私「わかりました」
先輩「あれだよね。帰れない理由とかって別にないんだよね。タイミング逃したら、本当に帰りづらくなっちゃうから」
私「はい」
彼氏「じゃあ、俺、もう寝ようかな」
先輩「え、もう？」
彼氏「疲れてんだよね」
先輩「そう。お風呂は？」
彼氏「明日の朝かな」
先輩「明日、仕事？」
彼氏「うん」
先輩「そっか」
彼氏「じゃあ、おやすみー」
先輩「おやすみー」
私「おやすみなさい」
——彼氏、いなくなる。
先輩「ごめんね。気持ち悪かったよね。っていうか、気持ち悪かったでしょ？」
私「いえ。そんな。大丈夫です」
先輩「あいつ気持ち悪いんだよね。ごめんね。我慢してね」
私「いえ、そんな。大丈夫です、私は」
先輩「私もシャワー浴びて、寝ようかな」
私「あ、はい」
先輩「シャワー使うよね？」
私「使わせてもらってもいいですか？」
先輩「うん。もちろん。着替えは？」
私「あ、あります。大丈夫です」
先輩「私たち、あっちの部屋で寝るけど、こっちで眠ってもらってもいい？」
私「あ、はい」
先輩「あ、毛布とか持ってこようか？」
私「はい。お願いします」
先輩「うん」
——先輩、毛布を持ってくる。
先輩「はい」
私「ありがとうございます」

先輩「もし寒かったら、エアコンもつけっ放しでいいし」
私「ありがとうございます」
先輩「あ、あのさ、明日、出かける予定ってなんかある？」
私「なにもないですね」
先輩「あ、そう。ずっと家にいる？」
私「予定ないんで」
先輩「うん。わかった。じゃあ、おやすみ」
私「おやすみなさい」
——先輩、いなくなる。

○深夜

——私、ソファに横になる。薄暗くなる。
私『先輩がシャワーに行って、すぐに横になった。横になったらもう駄目で、シャワーを浴びたりするのがとても面倒なことに思えた。今日はこのまま眠るだろうな。シャワーも歯磨きもトイレもせずにこのまま眠る。明日、シャワーを借りよう。歯ブラシって持ってきてたかな。バッグの中を探すのも明日にしよう。なかったら買いに行かなくちゃ。
眠たいけど、体も心も緊張しているのか、なかなか眠ることができない。バッグからスマホを取り出して、見る。親からたくさんのラインとたくさんの着信があった。うざいなあ。自分でも何故だか説明できないけど、信じられないくらいイラっとした。ムカつく。ムカつくムカつくムカつく。今にも叫びだしたい気持ちを、人の家に泊まらせてもらってるんだって抑える。そのままスマホの電源を切って、バッグの中に戻す。
気持ちも落ち着いてきたし、そろそろ本当に眠たくなってきた。目を瞑る』
——先輩と彼氏の会話が聞こえてくる。

彼氏「なあ」
先輩「あ、起きてたんだ」
彼氏「あの子、なに？」
先輩「知らない」
彼氏「知らないって」
先輩「帰ってきたら、エントランスのところに座ってて、話聞かないと仕方がないじゃん。寒そうで可哀想だったし、私もまさか家出って思ってなかったけど」
彼氏「え、怒ってる？」
先輩「え、なんで？」
彼氏「いや、怒ってるように聞こえたから」
先輩「え、私？」
彼氏「別に俺は、怒ってないよ」
先輩「そう？　勝手に泊めることにしたから怒ってんのかと思った」
彼氏「違う違う。そうじゃないよ。びっくりはしたけどね。あの子、可愛いよねって話がしたかったの」
先輩「あ、気持ち悪かったよ、あれ」
彼氏「え、なに？」
先輩「可愛いっていうの」

彼氏「そうかな」
先輩「全然キモかった」
彼氏「キモいって言うなよ」
先輩「だって、本当にキモかったんだもん」
彼氏「可愛いって言われたら嬉しいんじゃないの？　普通は」
先輩「状況によるでしょ、それは」
彼氏「よくわからないな」
先輩「知らない男の人から可愛いって言われても気持ち悪いだけだよ」
彼氏「そうかなあ。知らないからこそ嬉しいんじゃないの？」
先輩「全部、自分の都合のいいように解釈するじゃん」
彼氏「ポジティブなんだよね、俺」
先輩「馬鹿なだけだよ」
彼氏「うるせえよ。でも、嬉しそうにしてたよ」
先輩「それが馬鹿だって言ってんの」
彼氏「馬鹿って言うなよ」
先輩「寝ないの？」
彼氏「寝るよ」
先輩「私も寝るし、向こう寄って」
彼氏「なあ」
先輩「おやすみ」
彼氏「あ、ちょっと待って」
先輩「なに？　眠いんだけど」
彼氏「お腹触ってもいい？」
先輩「あ？」
彼氏「お腹触りたい」
先輩「したいの？」
彼氏「したい」
先輩「馬鹿じゃないの。後輩来てんだよ。よくそんな気持ちになれんね」
彼氏「俺、関係ないもん」
先輩「馬鹿馬鹿。疲れてるから、寝るね」
彼氏「駄目？」
先輩「駄目。おやすみ。さっさと寝ろ」
私『目を瞑っていても、隣の部屋から会話が漏れ聞こえてきて、それが気になって眠れない。私の話をしているのだとわかって、緊張した。悪いように言われてないことがわかったから、体から力が抜ける。それからは何を言っているのかよくわからなかったけど、一度気にしてしまったら気になってしまって、ずっと聞き耳を立ててしまった。
どうやら先輩は眠ったようで、静かになった。私もウトウトしてきた。ようやく眠れそう。
人の気配がする気がする。誰かが私のことを見ている』
――これまでに、彼氏、私が横になっているのを見ている。
――私、体を起こして、

私「え、誰ですか？」
　　――彼氏、やり過ごそうとして無視する。
私「誰ですか？」
彼氏「あ、ごめんね。起こしちゃった？」
私「え？」
彼氏「いや、別に起こすつもりはなかったんだけど」
私『目が慣れてきたら、その気配の正体がわかった。先輩の彼氏さんだった。どうして私のことを見ていたのだろう。ぼーっとしている頭で一生懸命考える。言葉になっていかないけど、気配を感じたときからずっと怖かった』
私「彼氏さん、ですか？」
彼氏「そうだよ」
私「寝ないんですか？」
彼氏「え、なんで？」
私「疲れてるっておっしゃったから」
彼氏「トイレに行ったら目が冴えちゃって」
私「そうなんですか？」
彼氏「寒くない？　大丈夫？」
私「毛布ももらったし、暖房もついてるんで、あの、大丈夫です」
彼氏「眠れそう？」
私「え？」
彼氏「ごめんね。敷布団とか、予備があったらよかったんだけど、うち、そういうのなくて。お客さんって全然来ないからさ」
私「あの、なんですか？」
彼氏「ヒットポイント回復できそう？」
私「そうですね。おかげ様で」
彼氏「それはよかった」
私「私、眠いんで、眠ります」
彼氏「あ、うん。どうぞ」
私「どうぞじゃなくて。彼氏さんは寝られないんですか？」
彼氏「まあ、眠たくなったら寝るけど」
私「あの、ずっとここにいるつもりですか？」
彼氏「いや、だから、眠たくなったら寝るけど」
私「あの、怖いんですけど、そこにいるの？」
彼氏「え、なんで？」
私「見られてるのとかも気になるし」
彼氏「あ、そう。あ、駄目なんだ」
私「駄目っていうか、私、そういうの緊張しちゃうんですよ」
彼氏「心配してるんだよ」
私「どういうことですか？」
彼氏「一人で眠れるかなって思ってさ」

私「大丈夫ですから、私」
彼氏「黙っとくからさ。お願い。見守らせて」
私「あの、大きい声出しますよ」
彼氏「え、なんで？」
私「おかしいんじゃないですか？　なんですか、心配してるって？　見守るって？　大きい声出しますよ、大きい声を」
彼氏「あ、駄目駄目。しー。起きちゃうから」
私「あの、ほんとに」
彼氏「ごめんごめん。冗談じゃん、冗談。じゃあ、戻るから、戻るからね、安心して眠ってね」
——彼氏、行こうとしてやめる。
彼氏「あ、ごめん。あと、彼女には内緒にしといてね。ね、内緒にしといて。約束してくれる？」
私「わかりました」
彼氏「ありがとう。おやすみ」
私「おやすみなさい」
——先輩いなくなる。
私『彼氏さんが部屋に戻っていった。そのあと、いくら眠ろうとしても体が震えてしまって全然眠れなかった』
——暗転。

○次の日の朝
——明るくなると、私は眠っていて、先輩は出かける支度をしている。
——私、がばっと起きる。
先輩「あ、起きた。おはよう」
私「おはようございます。眠っていましたか、私」
先輩「うん。寝てたよ」
私「そうですか」
先輩「よく眠れた？」
私「いや。まあ、はい」
先輩「それはよかった」
私「あの、彼氏さんは？」
先輩「もう出かけたよ。仕事。え、なんで？」
私「別になんでもないです」
先輩「私ももう行くけど」
私「え？」
先輩「私も今から大学行かないとだから。一緒にいてあげられなくてごめんね」
私「全然、あの、大丈夫です」
先輩「あ、サンドウィッチ作ってあるから食べてね」
私「ありがとうございます」
先輩「今日はどうするつもり？」
私「なにも決めてないです」

先輩「そう。自分の家だと思ってゆっくりしてくれたらいいからね」
私「本当にありがとうございます」
先輩「ごめんね。私、もう行くね。なにかあったら連絡ちょうだい」
私「わかりました」
先輩「じゃあ、行ってきます」
私「あ、いってらっしゃい」
——先輩、出て行く。
私『先輩が大学に行って、先輩の部屋で一人になった。毛布から抜け出して、先輩が作ってくれたサンドウィッチを食べる。サンドウィッチを食べ終わったあと、ちょっとぼーっとして、バッグから歯ブラシを出して歯磨きをして、シャワーを浴びる。シャワーを浴び終わって、また部屋で一人でぼーっとする。テレビもないし、スマホを出して電源を入れるのも面倒くさい。ぼーっとしている。
昨日の夜のことを思い出してしまう。怖かった。体が強張る。彼氏さんはどういうつもりで私のことを見ていたのだろう。もし、私があのタイミングで起きなかったらどうなっていたのだろう。あのとき、大きな声を出すって言えなかったらどうなっていただろう。
昨日はあれから全然眠れなかった。眠っていなかったつもりだったけど、眠っていたみたい。でも、全然熟睡できてないから眠たい。やることもないし、眠ろうかな。でも、彼氏さんが帰ってきたらどうしよう。それこそ逃げ場がどこにもないじゃないか。
考えすぎかもしれないけど、無防備に眠っている私に近寄ってくる彼氏さんのことを想像したら怖くなってしまった。毛布をたたんで、食器を流しに持って行って、洗った。それから、荷物をまとめた。良くしてくれた先輩には申し訳ないけど、こんなところにはもういられないからこの部屋を出て行く。置き手紙とかは、まあいいか。なんて書いたらいいかわかんないし。彼氏さんの悪口ばっかり書いてしまいそう。先輩は、あんな彼氏とは別れた方がいいと思う』

○住宅街、昼間
私『先輩のマンションを出て、駅に向かう。昨日の夜来た道を引き返す。人目につかないようにコソコソ歩く。平日の昼間の住宅街には人が全然いないけど、高校生のくせにこんな時間に出歩いているのを誰かに見られたらなんだかよくないよう気がして』

○先輩が住んでいる街の駅、相対式ホーム
私『駅に着いて、どっちに向かうホームに行くのか迷う。帰ろうかな。でも、昨日から親からのラインや電話を全部無視していたことを思い出す。電源も切っている。気まずいな。家に帰ったら、たぶん、ものすごく怒られるだろうな。今、帰ってもどうせもう私の居場所なんてないし。
悩んで、家に向かうのとは逆のホームに行く。終点の大都会の街に行くことに決めた。目の前を特急とか急行とかが通り過ぎていく。私はベンチに座ってそれを見ている。家に帰った方がいいんじゃないかって、もう後悔している。何度も後悔した。でも、階段を下りて、階段を上ってって、反対側のホームに行くのがすごく面倒くさい。
私はどうなってしまうのだろう。このまま大都会の街へ行ったら本格的な家出になってしまう。大冒険になってしまう。大丈夫か、私。そんな覚悟あるのか、私。いや、どうでもいいや。眠たい。自分の大事なことなのに、ちゃんと考えることができないくらい眠たい。ちゃんと考えることができない。
各駅停車の電車が駅に着いて、良い悪いの判断ができない私はそれに乗る。座ってすぐに眠った』

○大都会の街

私『いつの間にか、終点。終点のアナウンス。慌てて起きて電車を降りる。人の流れに沿って、改札を抜ける。

久し振りに来た大都会の人の多さ、建物の大きさに圧倒される。学校に行ってるはずの時間に学校に行っていない罪悪感と黙って先輩の家を出て行った罪悪感を抱えている私は、街の喧騒に身を隠して安心感を得る。電車の中で少し眠ったとはいえ、まだまだ全然眠り足りない。わけがわからないくらい眠たい。安全な場所で眠りたい。

安全に眠れるような場所を探して、街をさまよう。街には、こんな時間なのに、私と同じくらいの歳の子がいっぱいいる。不思議だ。みんな学校はどうしているのだろう。休みなのかな。そんなわけないか。私はまだ流れに身を委ねることができない。会員カードを持っているネカフェを見つけた。六時間パックで入店してそこで眠る』

――私、椅子に座って、眠る。起きて、

私『ようやく眠れた。眠ったような気になれた。たぶん、四、五時間は眠れたと思う。もう全然眠くない。すっきりした。余った時間、ユーチューブで音楽を聴いたりＳＮＳを確認したりジュースを飲んだりして過ごす。ネカフェを出る。

目的もなく街をぶらついていると、目立たないところに、自分の身は自分で守りましょうショップ大黒武器という小さな看板が出ていることを発見する。自分の身は自分で守りましょう、か。昨日の夜のことを思い出す。だんだんムカついてきた。全部、先輩の彼氏のせいだ。あいつさえ、私が眠ろうとしてるそばで見ていなければ、ゆっくり眠れていたし、こうやって今街をさまようこともなかった。

街には、あの彼氏のような男がたくさんいるような気がする。そう思うと、行き交う人たちが全員そう見えてくる。自分の身は自分で守らなければいけない。もう二度とあんなことがあってはならない。今度は襲われるかもしれない。そのときのために武器を持っていなければ。武器さえ持っていれば、たとえ襲われることがあったとしても大丈夫だ』

○武器屋

私「すいません。すいませーん。誰もいないのかな。すいませーん」

――武器屋、出てくる。

武器屋「お嬢ちゃん、こんなところになんの用だい？　いらっしゃいませ、ここは違法な武器屋。自分の身は自分で守りましょうショップ大黒武器です」

私「え、違法？」

武器屋「もちろん合法なものも売っていますが、それはカモフラージュで、違法なものを主に売っています。こんなところに一体なんの用だい？」

私「私、武器がほしくて」

武器屋「それはいったいどんな武器かな？」

私「表の看板に、自分の身は自分で守りましょうって書いてあったじゃないですか」

武器屋「自分の身は自分で守りましょうショップだからね」

私「私、男の人からトラウマになるくらい怖い目にあって、それで自分の身を守るための武器がほしいなって思って」

武器屋「ああ、護身用の武器ね」

私「はい」
武器屋「たとえば、トカレフなんてどうかな？」
私「トカレフ？　トカレフってなんですか？」
武器屋「聞いたことない？　有名なんだけどな」
私「いや、ちょっとわからないです、トカレフ」
武器屋「トカレフはピストル」
私「ピストルなんて無理ですよ」
武器屋「あー、そう。なんで？」
私「ピストルなんて使いこなせないです」
武器屋「あー、そう。ちょっと練習だけしてみる？」
私「練習？」
武器屋「指でピストルの形作って、パンって」
私「こうですか？」
武器屋「ほら、僕のこと撃ってみて」
私「撃つ？」
武器屋「パンって」
私「パン」
武器屋「うぅ」
——武器屋、死ぬフリ。
私「え、本当ですか？　大丈夫ですか？」
——武器屋、生き返る。
武器屋「ピストル、こんなに上手に使えるじゃない？」
私「全然違うでしょ、本物とは」
武器屋「練習したら大丈夫だと思うけどね」
私「ピストルは危ないんでやめときます」
武器屋「あー、そう。トカレフ駄目か。じゃあ、マシンガンはどうかな？」
私「マシンガン？」
武器屋「撃ってみて。だだだだだって」
私「だだだだだだ」
——武器屋、死ぬフリ。
——生き返る。
武器屋「お上手」
私「いやいやいや。マシンガン持たされても」
武器屋「日本刀はどうかな？」
——私、切る。
——武器屋死ぬフリ。生き返る。
私「日本刀もいいです」
武器屋「あ、そう。えっと、お嬢ちゃんの護身用でしょう」
私「そうです。私が使えそうなやつでお願いします」
武器屋「ビックリハンマーとかはどう？」

私「どうビックリなんですか？」
武器屋「重たくてびっくり」
私「私、非力なんで駄目です。持てないです」
武器屋「重たくてインド人もびっくり」
私「え？」
武器屋「じゃあ、これはどうかな？　トンファー」
私「トンファー？」
武器屋「モーニングスターは？」
私「モーニングスター？」
武器屋「鎖鎌は？」
私「マイナーな武器ばっかり言うのやめてください」
武器屋「じゃあ、極意書とかどうですか？」
私「極意書？」
武器屋「極意書を読んで、あなた自身が身を守る術を身につけるっていう考え方なんてどうですかね？」
私「たとえばどういうものがあるんですか？」
武器屋「平手打ちの極意書とか」
私「あー」
武器屋「平手打ちの極意書を読むとね、めちゃくちゃ平手打ちが上手になりますよ。読み終わって、平手打ちの達人になれたら、パチンってやるじゃない。そしたら、首から上がキュルキュルキュルキュルってまわって、首がプチンってねじ切れるから。それで平手打ちで相手を殺せるっていうね。どう？」
私「ちょっと怖いですね」
武器屋「どう怖いの？」
私「ねじ切れちゃうっていうのが」
武器屋「お嬢ちゃん、あんた、本当に自分の身を自分で守るつもりはあるのかい？」
私「ありますよ」
武器屋「うーん。勇気が出ない感じですかね？」
私「いや、勇気っていうか、ピンとこないっていうか」
武器屋「じゃあ、これはどうですか？　勇気が出る覚せい剤」
私「え、覚せい剤？」
武器屋「勇気が出る出る覚せい剤」
私「え、覚せい剤？」
武器屋「気持ちの問題だからね」
私「え、いや、覚せい剤いらないです。え、怖い」
武器屋「怖くないのがいいんだよね」
私「はい。そうしてください」
武器屋「ペッパー君なんてどう？」
私「怖くないですけど、ペッパー君のどこが武器なんですか？」
武器屋「ペッパー君に殺人のＡＩを入れてるから、君の操作ひとつで、殺せるよ。殺人ペッパー君」
私「怖いですよ。いりません」
武器屋「あ、そうだ、お嬢ちゃんにとっておきのものを見せてあげよう。もし、お嬢ちゃんが気に入れば

それを買ってもいい。エクスカリバーだ。伝説の剣だよ。石に突き刺さっていたのを俺が引っこ抜いてきた。お嬢ちゃんもエクスカリバーさえ持っていれば安心だよ。向かうところ敵なしさ。なんていって伝説の剣なんだからね。攻撃力が桁違いさ。おっと。どうやらお嬢ちゃんは装備できないみたいだ。ごめんね」

私「え？」

武器屋「だから、お嬢ちゃんにエクスカリバーは売ることはできない。装備できないものを持っていたってしょうがないだろう。ごめんね」

私「あの、私、護身用の武器がほしいんですけど」

武器屋「あ、そうだ、お嬢ちゃんにとっておきのものを見せてあげよう。もし、お嬢ちゃんが気に入ればそれを買ってもいい。マスターソードだ。これも伝説の剣だよ。石に突き刺さっていたのを俺が引っこ抜いてきた。お嬢ちゃんもマスターソードさえ持っていれば安心だよ。向かうところ敵なしさ。なんていったって伝説の剣なんだからね。攻撃力が桁違いさ。おっと。どうやらお嬢ちゃんは装備できないみたいだ。ごめんね」

私「え？」

武器屋「あ、そうだ、お嬢ちゃんにとっておきのものを見せてあげよう。もし、お嬢ちゃんが気に入ればそれを買ってもいい。あの剣だ。あの、名前はなんていったかな、わかんないけれども、あの剣だよ。あの剣。これも伝説の剣だよ。いや、たしか、伝説の。定かではないけれども。あの剣が置いてあるところからかっぱらってきたのさ。俺も若かったね、あの頃は。お嬢ちゃんもあの剣さえ持っていれば安心だよ。向かうところ敵なしさ。なんていったって伝説の剣なんだからね。いや、たぶんね、伝説。攻撃力が桁違いさ。おっと。どうやらお嬢ちゃんは装備できないみたいだ。ごめんね」

私「え？　突然どうしたんですか？」

武器屋「いや、装備できないみたいだから」

私「護身用の武器が欲しいんです、私は」

武器屋「だから、こうやって探してあげてるじゃないか」

私「私、トカレフやエクスカリバーなんて、そんな大袈裟なものいらないんです。攻撃力なんて高くなくてもいい。いざというときに役に立つような武器がほしいです」

武器屋「いざというときに役に立つ、ね。最終兵器なんてどう？」

私「え、最終兵器？」

武器屋「これはね、いざというときに役に立つよ。最終兵器を使うと、地球が爆発します」

私「荷が重い荷が重い、それは」

武器屋「なんか、あの、答えづらいようなことを訊きますけどね」

私「はい」

武器屋「お嬢ちゃんは処女かい？　処女でしょ、処女」

私「あ、え？」

武器屋「お嬢ちゃんはまだ男を知らないかどうかを訊いているんだ」

私「それが一体なんの関係があるんですか？」

武器屋「いやね、お嬢ちゃんの身を守るためのぴったりな武器があるんだ。でも、それは処女じゃないと正しい効果を発揮しない。その武器は使う人を選ぶんだ。そして、俺はお嬢ちゃんがその武器にふさわしい人間なのかどうかを知るために訊いているんだ。いやらしい意味とか気持ちとかはないよ」

私「いや、えっと」

武器屋「ちなみに、俺は童貞。俺、童貞の武器屋」
私「いや、訊いてないです」
武器屋「どうだい、これで言いやすくなったろう。俺だって恥ずかしいことを言ったんだから、答えてよ。
　処女？　処女じゃない？」
私「私、処女です」
武器屋「あ、そう。よかった」
私「どんな武器なんですか？」
武器屋「これなんだけど」
　――武器屋、懐からナイフを取り出して、
武器屋「これは、聖なるナイフっていってね、処女が使うと、そのナイフに宿った聖なる力が呼応して攻撃力が増すんだ。それに、ビックリハンマーやエクスカリバーや最終兵器と違って小さいし、護身用の武器としてはいいと思うんだけど」
私「どうして、処女が使うと聖なる力が呼応するんですか？」
武器屋「まあいいじゃない。はるか昔に作られた武器だから勘弁してよ。たしかにね、俺も時代錯誤だとは思うけどね。どうかな？　持って帰るかい？」
私「これでちゃんと自分の身を守れるんでしょうか？」
武器屋「十分守れるぜ」
私「聖なるナイフ、買います」
武器屋「どうもね。あ、ちょっと待って。聖なるナイフに宿いし、清らかなる神々の御心よ、聖なるナイフを手にしたこの処女の操を守りたまえ。はい、どうぞ」
　――武器屋、私に聖なるナイフを渡す。
武器屋「よし、行ってよし」
　――武器屋、いなくなる。

○大都会の街
私『自分の身は自分で守りましょうショップ大黒武器を出る。ポケットには聖なるナイフ。ポケットの中で握りしめてみる。なんだろう、この安心感は。強くなった気がする。もう誰に襲われても大丈夫だと思う。このナイフで返り討ちにしてやる。
　それにしても、聖なるナイフってなんだ。握っている感じは普通のナイフ。一度だけクラスの不良の友達のナイフを持たせてもらったことがある。それと同じ。
　処女だからって私の中の何かが変わるのかわからない。知らないことを体験するのだから精神的なところは変わるかもしれないけど。でも、本質的にはなにも変わらないはず。したことがあってもなくても私は私だ。
　私はこの街で行く当てをなくして、ただたださまよい歩いている。なにしに来たんだっけ。それすら忘れかけている。いや、本当になにしに来たんだっけ。ネカフェで寝て、自分の身は自分で守りましょうショップで護身用の武器を買って。もうこの街には用はない。というか、初めから用なんてなかった。お金もほとんどなくなっちゃったし。
　でも、やっぱり家には帰りづらくて、街にあるベンチに座る』

○夕方

――私、ベンチに座る。

――日が暮れかかっている。夕日だが赤いというわけではない。

私『なにもすることがなくて、あっという間に夕暮れ。さすがに昨日みたいなオレンジには今日の景色は染まらない。特別な日だったのだ、昨日は。どうかしてたんだと思う、私。ずっと家出したいなって漠然と思っていたけど、本当に実行に移すなんて。夕日にそそのかされたのかな、と思う。

ベンチに座っている間、ずっと行き交う人を見ていた。いろんな人がいる。この人たち全員に居場所があるなんて思えない。中には私よりもずっと孤独な人だっているはずだ。私の置かれている状況をその人と比較してみる。可哀想。その可哀想な人と比べたら私は随分マシだ。

他人を想像して、その人と比べて、楽な気持ちになる。罪悪感は覚えない。それだけ私は今回の家出、家出っていうかこの冒険で強くなったのだった。強くなったというか、上手に生きられるようになった。それは良いことかどうかはわからないけど。

心配しているだろうな。突然そんなことを思う。そりゃそうだろうなにも言わずにいなくなって、連絡だってずっと無視している。普通の、いたって普通の親だ。心配しているに決まっている。帰ろうかな。許してもらえるように謝ればちゃんと許してもらえるだろうなってずるい計算だってできるようになったし。

私はバッグからスマホを取り出す。ずっと無視してごめんって、今から帰るって連絡を入れよう。電源をつけるためにボタンを長押しする。電源が入る前に声をかけられた』

――少女、これまでにいる。

少女「誰？」
私「え？」
少女「ねえ、誰？」
私「え、私？」
少女「うん」
私「あ、ごめんなさい。ここってあなたの場所だったの？」
少女「ううん、違うけど」
私「え？」
少女「違うけど。私の場所ってことはないけど」
私「え、誰って？」
少女「うん。誰？」
私「誰ってどういうこと？」
少女「見たことないから、誰かなって」
私「変じゃない？」
少女「え、どうして？」
私「だって、いきなり誰って」
少女「だって、見たことないし」
私「見たことないと思うけど、おかしくない？」
少女「ここには初めて来た？」
私「うん」
少女「あ」
私「え？」

少女「ああ。もしかして、知らない？」
私「なにを？」
少女「あ、本当に知らないんだ」
私「だから、なにを？」
少女「ここがどういう場所だか知らないんだ」
私「え、どういう場所なの？」
少女「本当に知らないの？」
私「うん」
少女「教えてあげようか」
私「教えて」
少女「駄目だよ、こんなところに座ってたら。知らないのに」
私「教えてって」
少女「危ないよ」
私「どう危ないの？」
少女「ここはね、そういう場所なの？」
私「わからない」
少女「え？」
私「そういう場所じゃわからないよ」
少女「あ、そう」
私「うん」
少女「ここにね、座ってたら大人の男が来て、誘われる」
私「誘われる？」
少女「うん」
私「あー」
少女「わかる？」
私「うん。わかる。わかった。そういう場所なんだね、ここは」
少女「私は、ここに来る子のことは大体知ってるから。ほとんどの子と喋ったことはないけど」
私「だから、誰って訊いてきたの？」
少女「うん。そう。見たことないから。知らないんだったら、危ないよ」
私「危ないの？」
少女「そういう場所だからね」
私「私でも危ないかな？」
少女「危ないと思うよ。そういうつもりじゃないんだったら、ここにいない方がいい」
私「そっか」
少女「行かないの？」
私「うん」
少女「そっか」
私「お金もないし、行くところもないからね」
少女「そっか。可哀想だね」
私「可哀想かな、私」

少女「お金もないし、行くところもないんだったら可哀想だよ。帰るところもないの？」
私「ないね」
少女「可哀想」
私「え、じゃあ、あなたは？」
少女「ねえ、隣、座ってもいい？」
私「いいよ。いいよっていうか、もともと私の場所じゃないし」
少女「ありがとう」
——少女、座る。
少女「何歳？」
私「いくつに見える？」
少女「なにそれ。つまんないよ、それ」
私「ごめん」
少女「いくつに見えるって普段から言ってるんですか？」
私「言ってないよ」
少女「じゃあ、なんで？」
私「なんでだろうね」
少女「面白いって思って言ったんですか？」
私「そんなことないけど」
少女「そんなことない？」
私「なんか、わかんないけど、言ったの。別に面白いって思ってたわけじゃないよ」
少女「何歳？」
私「いくつに見える？」
少女「えっとね」
私「うん」
少女「いくつに見えるってどうしても言いたいんだね」
私「まあね」
少女「えっとね、わかんない」
私「わかんないの？　考えた？」
少女「考えてない。わかんない」
私「悲しいな」
少女「考えてもらえなかったのが？」
私「そう。考えるくらいはしてほしかったな」
少女「いいから。何歳か教えて」
私「十七」
少女「十七歳？」
私「うん」
少女「十七歳かー。セブンティーン。セブンティーン。ふふふふふ」
私「おかしい？」
少女「うん」
私「おかしいかなあ」

少女「年上じゃん。ふふふふふ」
私「そんなおかしくないよ」
少女「笑われて傷ついた？」
私「傷つかないけど。え、いくつ？」
少女「いくつだと思う」
私「えっと、いくつかなあ」
少女「教えてあげない」
私「教えてくれないの？」
少女「うん。教えてあげない。別に興味ないでしょ？」
私「そんなことないよ」
少女「でも、めんどくさいから教えてあげない」
私「そっか。教えてくれないんだったら別にいいけど」
少女「そういうつもりじゃないんだったら、危ないと思うよ」
私「私、でも、可愛くないよ」
少女「可愛いとか可愛くないとか関係ないよ。若いし。若かったら大丈夫」
私「大丈夫？」
少女「大丈夫っていうか、誘われる。若いっていうことが大事みたい。あいつら見境ないから」
私「本当？」
少女「本当。だって私も誘われるし」
私「え、可愛いよ」
少女「え、本当ですか？」
私「可愛いよ」
少女「ありがとうございます。ま、そんなのは別にどうでもいいんだけど。あー、駄目だ。照れちゃった」
私「照れてるのも可愛い」
少女「言われ慣れてないから照れちゃうね。私のことはどうでもいいんだ。あのさ、そういうつもりなの？」
私「そういうって」
少女「だから、そういう」
私「違うけど。知らなかったくらいだし」
少女「じゃあ、どっか行った方がいいよ。ここ、本当、面倒くさいよ」
私「本当かな？」
少女「本当だって」
私「危ないことってあったことある？」
少女「あるよ」
私「あるのにここに来るんだ？」
少女「生きていかなくちゃだからね。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ（芥川龍之介『羅生門』からの引用）」
私「そっか」
少女「もう危ないことにあうことも滅多にないけど、まだたまにあるけど」
私「なんで滅多になくなったの？」
少女「大体わかってくるよ、この人は安全とか、この人なんか危険だなとかって」

私「ずっとやってるんだね」
少女「まあね」
私「私にもできるかな」
少女「なにを？」
私「あなたと同じこと」
少女「できると思う。やりたいんだったら、だけど」
私「私も生きかなくちゃだからな。私もそうしなければ、餓死をする体なのだ」
少女「ふふふ、大変だね」
私「私、家出してるんだけど、お金なくなっちゃったしなあ。泊まる場所もないし」
少女「大変だ」
私「そう。大変なんだ。ねえ、危ないことってどんなのがあった？」
少女「殺されかけたことあるよ」
私「え、殺されかけたことあるの？」
少女「やめときなよ」
私「え？」
少女「たぶん、わかんないけど、向いてないと思うよ」
私「え？」
少女「私わかるんだけど、向いてないと思うよ。無理だと思う」
私「そうかな」
少女「うん」
私「私、頑張れると思うんだけどな」
少女「大変だから？」
私「うん。そう」
少女「本当はそんな大変じゃないでしょ」
私「そんなことないよ」
少女「向いてないと思うよ」
私「そうかなあ。でも、私、あれ持ってるよ」
少女「なに？」
私「聖なるナイフ」
少女「なにそれ」
私「処女が使うとすごい攻撃力が増すんだって」
少女「処女じゃん？」
私「うん」
少女「絶対やめといた方がいいよ。無理だよ」
私「でも、なんかあったらこれ使うから大丈夫」
少女「これ使うからって。ふふふ」
私「おかしい？」
少女「おかしい」
私「年下のくせに生意気だぞ」
少女「怒られちゃった」

私「あ、ごめん。本当に怒ってるわけじゃないよ」
少女「うん。わかってるよ」
私「私にだってできるよ」
少女「そう。じゃあ、頑張って」
——これまでに、少女はスマホを見ている。
——少女、立ち上がって行こうとする。
私「あれ、どこへ行くの？」
少女「誘われたからね。飯食わしてくれるって」
私「その人は危険じゃないの？」
少女「このおじさんはね。じゃあね」
——少女、去る。
私『寒いな』

○夜

——男、やって来る。私の近くで、立ち止まってしばらく黙っている。
男「ねえ。寒くない？」
私「そうですね」
男「ずっとここにいるの？」
私「はい」
男「よく耐えられるね。俺なんか、ちょっと立ち止まってるだけで駄目だわ」
私「そんなに寒いですか？」
男「そうだね。なんでずっとここにいるの？　お金ないの？」
私「そうですね。お金、なくなっちゃいました」
男「可哀想だね」
私「そうですか？」
男「一緒にあったかいところ行かない？」
私「あったかいところ？」
男「まあ、あったかいところ。お金もあげるからさ」
私「私でもいいんですか？」
男「行ってくれる？」
私「わかりました」
男「ありがとう」
——私、立つ。二人、黙って歩く。
男「ここでもいい？」
私「あ、ラブホテル」
男「もうちょっと綺麗なところの方がいいかな？　このホテルだと古くて汚くて嫌だよね」
私「え、いや、あったかいところってラブホテルなんですか？」
男「そうだよ。あれ、嫌かな？」
私「嫌じゃないです。というか、びっくりしちゃって」
男「びっくりしちゃっただけ？」

私「そうですね」
男「なにもしないから、ね、なにもしないって約束するからいいよね」
私「なにもしないんですか？」
男「うん。なにもしないよ。だから、いいよね？」
私「はい。え、なにもしてないんですよね？」
男「そうだよ」
私「じゃあ、はい」
男「ここよりもっと新しくて綺麗なところの方がいいかな？　そっちの方がいいよね？　そっち行く？」
私「ここでも私、大丈夫です。構いません」
男「そうか。助かるよ。ありがとうね。じゃあ、行こう」

○ホテルモナリザ
私『ホテルモナリザ。今までの人生の中で一度もラブホテルに来たことのない私でも、この建物が古くて汚いということはわかる。そこに知らない男の人と来ている。知らない男の人は、相手の顔が見えなくなっている受付でお金を払い、鍵をもらっている』
男「じゃあ、行こう。三階だって」
私『促されるままにエレベーターに乗る。エレベーターは怖くなるような音を立てて、ゆっくり三階まで上がっていく。知らない男の人と狭い空間にいる。緊張もなにもしない。悟りを開いたのかもしれない。エレベーターが三階に着いて、扉が開く。知らない男の人が先にエレベーターを出る。このまま閉まるのボタンを押して、ホテルモナリザから逃げ出したら面白いかな。そんなことないか。私は知らない男の人の後ろをついていく。黙ってついていく今の私、すごく可愛いかもしれない。いや、たぶん愚かだよ。愚かだからそう見えるだけ。
三〇三号室。建物全体は汚いけど、部屋だけは、そういうことをする部屋なんだからもしかしたら綺麗かもしれないかと思ったら、やっぱり部屋も汚かった。あと、薄暗かった。薄暗いように思った。私、ここで知らない男の人と初めてするんだなあ、と思うと不思議な気持ちがしてくる』
男「汚いけど、本当にいい？」
私「構いません」
男「じゃあ、入って」
私「お邪魔します」
私『知らない男の人の手が、そっと私の背中を押す』
——男、ベッドに座る。
男「そんなところで突っ立ってないで、こっち来て座ったら」
私「あ、はい。そうします」
——私、男のとなりに隙間を開けて座る。
男「緊張してる？」
私「あ、はい」
男「緊張なんてしなくてもいいのに。さっきも言ったと思うけど、なにもしないから安心して」
私「はい。でも、いいんですかね？」
男「ん、なにが？」
私「なにもしないのに、こうやってあったかいところに泊めてもらって。それにお金もいただけるんです

よね」
男「なにかしてくれるの？」
私「いや」
男「こんなおじさんになにもしたくないでしょう？」
私「はい」
男「じゃあ、いいよ。なにもしなくて」
私「ありがとうございます」
男「かわいいね」
私「そうですか？」
男「高校生？」
私「はい」
男「どうしてあんなところにいたの？」
私「いや、あの、どうしてでしょう」
男「ずっとあそこにいたの？」
私「え、はい」
男「家出？」
私「はい」
男「それで、どこかに泊まるお金もなくなっちゃったんだ」
私「そうですね」
男「困ったね、それは」
私「はい」
男「可哀想だね」
私「そうかもしれません」
男「手、貸して」
私「え？」
男「手」
私「あ、はい」
——私、手を差し出す。
——男、二人の間の隙間を埋めて、私の手を握る。
男「冷たいね」
私「はい。ずっと外にいたんで」
男「あたためてあげるね」
私「え、あ、はい」
男「俺の手、あったかいでしょ」
私「そうですね」
男「どうかな。あったまってきた？」
私「あ、はい。あたたかくなりました。ありがとうございます」
男「いえいえ、どういたしまして。かわいいね」
——男、私の頭を撫でる。
私「いや、そんなことないですよ」

男「ほんとかわいい」
私『駄目だ。我慢できると思ってたけど、駄目だ。気持ち悪い』
私「あの、すみません」
男「え、なに？」
私「私、やっぱり帰ります」
——私、立ち上がって、逃げようとする。
男「どこに行くの？」
——私、立ち止まる。
私「え？」
男「どこにも帰れる場所ないんでしょ」
私「いや」
男「駄目だよ、帰ったりなんかしたら」
私「でも、なにもしないって言ったじゃないですか？」
男「なにもしてないよ」
私「え、いや」
男「なにもしてないでしょ」
私「でも、手握ったり、頭撫でたりしたじゃないですか」
男「それくらいのことで、なに騒いでんの？」
私「だって」
男「だいたい、ラブホテルに来て、なにもしないなんて思ってんの？」
私「え？」
男「そんなわけないだろ。ちょっと考えたらわかるだろ、それくらいのことは」
私「嘘ついたんですか？」
男「嘘って、お前。お前、どこ座ってたんだよ」
私「え？」
男「あそこがどういう場所か知らないわけないじゃん。知らないわけないだろう。な。知らないわけないだろう」
私「いや、そうですけど」
男「こっちにおいで。俺の隣に座って。寂しいから」
私「嫌です」
男「なんで？　寂しいから。こっち来て。座って」
私「嫌です」
男「ふざけんなよ、お前」
私「来ないでください」
男「は？」
私「来ないでください」
男「来ないでくださいってお前、なに言ってんの？」
——私、ポケットから聖なるナイフを出す。男に向けて構える。
男「は？」
私「あの、それ以上、近付いてきたら、これで刺します」

男「それで？」
私「はい。これであなたのこと、刺します」
男「なにそれ？」
私「聖なるナイフです」
男「聖なるナイフで俺のこと刺すの？」
私「近付いてきたら刺します」
男「そんなことできんの？」
私「え？」
男「そんなブルブル震えてて、そんなことできんの？」
私「できます」
——男、立ち上がって、
男「刺せるもんなら刺してみたらいいよ。ほら。ほら。刺してみろよ。なあ、刺せるもんなら刺してみろよ」
私「刺せます」
男「君みたいなかわいい子にはそんなことできないと思うけどね」
私「できます。刺せます」
男「そんな強がり言って。君、ほんとかわいいね」
——男、私に近付く。
私「来ないで」
男「かわいいね」
——男、私に近付く。
——私、男を刺す。何度も刺す。男、痛がって、やがて死ぬ。
私『人を殺してしまった』
——暗転。

——私と男、ベッドに座っている。
男「手、貸して」
私「え？」
男「手」
私「あ、はい」
男「あ、いや、両手」
私「え、はい」
——男、ネクタイをほどいて、私の手を縛ろうとする。
私「え、なにをするんですか？」
——私、驚いて手を引っ込める。
男「いや、手を縛ろうと思って」
私「ちょっとやめてください」
男「え？」
私「手、縛られたくないです」
男「なんで？」

私「え、だって、なんでって、え」
男「なんで、手、縛られたくないの？」
私「だって、怖いからです」
男「そっか。手、縛ったら駄目？」
私「駄目です。なにもしないって言ったじゃないですか？」
男「だいたい、ラブホテルに来て、なにもしないなんて思ってんの？」
私「え？」
男「手、縛らせてよ。お願いだから。ね。ね。怖くないよ。怖くない」
私「駄目ですって。怖い。あの、手、縛ってどうするんですか？」
男「俺ね、手縛って、自由奪って、君のこと殺そうと思ってたんだけど、駄目かな」
私「私のこと殺そうと思ってたんですか？」
男「殺してみたいんだけど、駄目？」
私「駄目です」
男「殺させてください」
私「嫌です」
——私、立ち上がって、ポケットからナイフを出す。
男「あ」
私「あの、それ以上、近付いてきたら、これで刺します」
男「それで？」
私「はい。これであなたのこと、刺します」
男「なにそれ？」
私「聖なるナイフです」
男「聖なるナイフで俺のこと刺すの？」
私「近付いてきたら刺します」
男「まあ、それもいいかな」
私「え？」
——男、私と対峙するように立ち上がりながら、
男「俺ね、誰でもいいから、誰でもいいからじゃないな、殺したら楽しいだろうなって思えるような可愛い子を殺してみたいって思ってたんだけど、でも、そんな子から殺されるのもいいかなって、今、思ったよ」
私「は？」
男「どっちも一緒だなって思ったのよ」
私「ちょっとなにを言ってるかわかんない」
男「わかんなくてもいいよ。それで刺してよ。その聖なるナイフで刺してよ」
私「え？　わかんないわかんない」
男「ここ、ここ。刺して、刺して」
私「刺したらいいんですか？」
男「そう。その聖なるナイフで刺してくれたらいいよ」
私「え？」
男「早くしないと俺が君のことを、この邪なるネクタイで縛って殺すことになるよ。いいの？」

私「嫌です。殺されたくないです」
男「そしたら、早く早く。刺して。何度も、何度も刺して」
——私、男を刺す。何度も刺す。男、痛がって、やがて死ぬ。
私『人を殺してしまった』
——暗転。

——明るくなると、私はナイフを握って立っていて、視線の先には男が死んでいる。
私『人を殺してしまった。ラブホテルの部屋の中に知らない男の人の死体。死体には、たくさんの刺されたあと。どうやら、この男の人は刺されて殺されたらしい。って私が刺して殺したんだけど。
それにしても、部屋の中に死体があるという風景は、というかそんな景色は慣れない。染みのある絨毯に血の海ができている。私も返り血を全身に浴びて赤くなってしまった。どうしよう。体はシャワーで流すとして、この服はどうしよう。着替えはまだあるから着替えて、この服はどこかに捨てなくちゃ。どこだったら見つけられないだろうか。
そうだ。自分の身は自分で守りましょうショップ大黒武器のあの童貞のお兄さんに相談しよう。あの人ならどうにかしてくれるはずだ。
血に染まった服を脱いで、バッグの中からビニール袋を出して、それに入れる。裸になって、バスルームに行って、シャワーで体のすみずみまで流して、バスタオルで体を拭く。血がついていないか丹念に確認する。ついていない。よっしゃ。死体を見ないようにしながら新しい服を着て。どうしても死体が目に入る。というか、ほとんど死体を見ながら着替えてた。
はっはっは。本当に人が死んでいる。人って本当に死ぬんだな。そりゃ殺したから死ぬんだろうけど、殺したら死ぬなんて知らなかった。というか、普通死ぬか？　殺したくらいで。普通死ぬか、殺したんだものな。
駄目だ。気が動転している。初めてのことで動揺している。とりあえず落ち着かなくては。深呼吸深呼吸。
部屋に死体がある。私が刺して殺した。早くここから逃げないと。でも、こんな時間にここから出たら絶対怪しまれる。
今何時だろう。スマホをバッグから出して、電源を入れる。時間を確認したら、またすぐに電源を切る。今、三時。気が滅入ってくるけど、もう少しここにいよう。せめて始発が動き出すまでは。
できるだけなにも考えずに、死んだようにただいる。時々スマホの電源を入れて時間を確認してすぐに電源を切る。
始発の時間が確か五時くらいだから、それまではここで、この部屋で頑張る。
またスマホの電源を入れて、時間を確認する。五時を過ぎていた。部屋を出る準備をする。
思い付いて、知らない男の人が持っていた鞄を探る。財布の中からお金を抜き出して、元に戻す。今まで生きてきた中で一番お金を持っている。なんでもできるような気がする。
部屋を出て、階段を降りながら、どうしたらフロントの人にばれないようにこの建物から出られるか考える。いや、無理か。階段を一番下まで降りて、フロントの人に話しかける』
私「すみません。私だけ先に出ても大丈夫ですかね。まだ、あの、連れが残ってるんですけど」
私『顔も見えないフロントの人は、はい、わかりましたって本当に面倒くさそうに言って私を逃がしてくれる。こっちから顔が見えないってことは、あっちからも顔が見えてないってことだから大丈夫。
とにかくホテルモナリザから離れなくちゃ。この時間はまだ街に人がいないから大丈夫だと思うけど、

もし人から怪しまれてると思ったら、駅ってどっちですかね、わからなくなっちゃって、って道に迷ったフリをすることにした』

○大都会の街、明け方

私『ホテルモナリザを出たときはまだ暗かったけど、だんだん明るくなってきた。夜明けの風を頬にあびる。涼しい。一昨日とか昨日とかの夜はあんなに寒かったのに、今は涼しいって感じてる。歩いて体が熱くなってるからかな。それとも、知らない男の人を殺した興奮がまだ残っているからかな。どちらにしても、風が涼しくて気持ちいい。

自分の身は自分で守りましょうショップ大黒武器はどっちだっけ。たしか、こっちだったと思う。記憶があやふやで道に迷ってしまいそうだ。

知らない男の人を何度も何度も刺して殺したけど、私は悪くないんじゃないかって気がしている。あのおじさんは、私くらいの女の子にいつも同じようなことをしてきたのだろう。慣れた手つきでわかる。なにもしないって騙して。

私が殺さなくても、いつか誰かに、私みたいな騙されてしまった女の子に、あの男の人は殺されていたはずだ。一体私のなにが悪いのか全然わからないし、実際全然悪くないと思う。

私はなにも悪くないはけど、でも、運だけは悪かったと思う。誰かが先にあの男の人を殺しておいてくれてれば、私が人を殺すこともなかったのに。

あーあ、どうして私に順番がまわってきてしまったのだろう。運が悪いだけでこんな目にあわされてしまった。あーあ、運が悪い私は可哀想だ。可哀想だな、私、本当に。あーあ』

――私、いなくなる。

――終わり。